

Cover History

— 表紙写真由来 —

海の中にできた畑 成山新田ものがたり —兵庫県たつの市—

兵庫県西播磨県民局光都土地改良センター 合 田 弘

1. はじめに

表紙写真、写真-1は、1月と11月初旬ごろ、たつの市御津町苅屋地区の一級河川揖保川の河口にある、海につきでて広がる干拓地の成山新田にて、夕日に光るニンジントンネルがまるで海の中にできた畑、波のように見える時期、また、秋冬ダイコンの収穫開始時期に撮影したものです。



写真-1 成山新田、ダイコン収穫開始時期 (11月初旬)

2. 西はりま地域をまもる水物語について

「海の中にできた畑(成山新田ものがたり)」¹⁾には、成山新田の干拓と農業の歴史、農民たちの苦労と復興の努力について、以下のように述べられています。

(1) 成山新田の開発 今では豊かな畑が広がる成山新田ですが、このようになるまでには、ここを干拓し、農業ができる土地にするために、たくさんの人々の大きな苦労があったのです。

この苅屋沖の砂浜を本格的に干拓しようと考えたのは、大阪の商人だった成山徳三郎でした。

目標面積を76haと決めて、多くの人を集め、1923(大正12)年に干拓工事が始まり、堤防の中に50haの土地と20haの池ができあがりました。徳三郎の力で初めて本格的な畑が完成したのを知った農民たちは大喜びでした。

(2) 自然災害と農民の苦労 1928(昭和3)年、夜が明けて、あたりの様子を見た徳三郎や農民たちは、

サツマイモ畑の姿を目にして呆然と立ち尽くすだけでした。

収穫前の立派なサツマイモが波に押し流され、掘り起こされ、すべてが塩水に浸かってしまい見るも無残な姿に変わり果ててしまいました。

それでも徳三郎は次の日から、畑を元に戻す工事にかかる費用を得るために銀行をたずね歩き、お金を出してくれるようにお願いしてまわりました。

やっとの思いで再び野菜の植え付けができるようにしたのでした。

しかし、それもつかの間、1933(昭和8)年、またまた大きな台風が押し寄せ、収穫ができはじめた畑の作物を根こそぎ海水が押し流してしまいました。

(3) 復興と地域の支援 御津小学校の校門にたくさんの子供たちが立ち、募金箱を持って必死になって呼びかけています。

「みなさん。成山新田にもう一度豊かな畑を取り戻しましょう。徳三郎さんのため…、成山新田の復興に役立てましょう。ご協力ください」

地元の子供たちが義援金を集め、徳三郎はその後、たび重なる台風による暴風雨や高潮に襲われながらも、成山新田で農作業をする人々を守るために、たくさんの資金を使って、堤防を高く強くし、畑の土を入れなおし、野菜が豊かに育つように農民たちの協力で、再び豊かな畑を目指す組み、復興支援を応援したのです。

しかし、1938(昭和13)年、徳三郎は、前の年に襲った台風でくずれた堤防を直す工事のための資金が得ることができず、新田を手放すことになり、持ち主が次々と変わって、成山新田を守る人がいなくなりました。

1946(昭和21)年、御津町長は、荒れ果てた成山新田を再び干拓できるように国や県に働きかけ、11年の歳月をかけ、1957(昭和32)年、約70haの畑が造成されました。この間、高潮が押し寄せてても海水が入らないようにするため、コンクリート製の強大な防潮堤や樋門が造られ、農家の人々が安心して野菜を作ることができるようになったのです。



写真-2 御津野菜センター



写真-3 切り干し大根天日干し風景

(4) **御津野菜センター** 江戸時代から干拓が進められてきた播磨灘周辺の新田は、工業が発達し人口が増えるにつれ、次々と工場や住宅地に変わっていきました。

しかし、成山新田だけは、もくもくと野菜づくりが盛んに続けられています。

また、「御津野菜センター」などが建設され、新鮮な野菜を早く売り出すため収益も高く、若い人たちも野菜づくりを受け継ぎ、将来への明るい展望が見えています（写真-2）。

旧揖保郡御津町では、1979（昭和54）年に春夏ニンジンを、また1981（昭和56）年に秋冬ダイコンを国の野菜指定産地として登録し、地元農家約50軒でつくる「御津町園芸組合」が約28haで青首大根を栽培しており、3月中旬まで収穫し、主に県内の各市場に出荷しています。

また、風光明媚な新舞子の対岸、成山新田の地形を活かした寒風と天日干しへぎゅっと濃縮した「切り干し大根」も名産品のひとつになっています（写真-3）。

併せて、約42haで春夏ニンジンも栽培しており、5月から7月まで収穫され、主に京阪神の各市場に出荷しています。

また、一瓶に朝採りニンジン約10本分を使用した100%ジュースの加工販売による6次産業化にも取り組んでいます。

3. おわりに

この物語のように、地域で言い伝えられた民話は数多く残されており、ため池など農業水利施設に関する民話を読んでみると、古くから農業水利施設と人々の関わりが深かったことがうかがえます。身近な農業水利施設ですが、ある時は、先人が命がけで造り、守り、私たちに残してくれた様子が民話の中に描かれています。

農業水利施設は農業のために水を貯めたり流したりするだけではなく、豊かな自然ややすらぎをもたらす貴重な水辺空間でもあります。また、ため池は雨水を一時的に貯める役割を果たしており、その洪水調整機能にも期待されています。これらの農業水利施設は地域みんなの貴重な財産です。

昔から先人により大切に扱われていたため池や井堰など、農業水利施設を深い感謝の気持ちをもって、私たち地域みんなで適切な管理を行い、次の世代へ残していきましょう。

引用・参考文献

- 1) 兵庫県西播磨県民局光都土地改良センター：海の中にできた畑（成山新田ものがたり）、西はりま地域をまもる水（ため池・井堰・水路）物語、兵庫県西播磨県民局光都土地改良センター、pp.9～13（2017）
- 2) 神戸新聞社：冬の味覚、食卓に向けて～たつの・御津のダイコン～、神戸新聞社（2025年11月13日付）